

ロシア中世庭園の終焉

— 帝室イズマイロヴォ領地屋敷の変遷

坂内知子

I. 中世ロシアの庭園

1. 異教的世界のロシアでは

中世以前にロシアに庭はあったのだろうか。あったとすれば、何を庭とみなすべきなのであろうか。森に住んでいた東スラブ人の土地への感覚の中に「庭」はどのように生じてきたのだろうか。

10世紀末のキリスト教受容以前で注目しておきたいのは、周囲から抜きん出て特異な形状の場所が崇拝の対象となっていたことである。特に川岸や湖岸では異教信仰の儀式が広く行われていた⁽¹⁾。

樹木信仰もロシアで顕著に見られる現象であった。「聖なる森」を畏怖し、樹木では樺の木が雷神ペルーンと結び付けられ、崇拝と儀礼の対象となっていた。白樺も「善きことと多産」のシンボルとして愛され、特に泉のそばの白樺の周りでは儀式がさかんに行われた。最大の祝祭は6月の夏至に行われた。集団で真夜中に水浴びをし、歌い踊り、楽器が鳴らされ、性的遊戯が行われた。晴れ着を着た娘たちが白樺を囲んで輪になって踊り、花や白樺の枝で頭飾りを編み、それを水に投げ入れるのだった。この祝祭はその後キリスト教受容後の習俗の中でも生き残り、「イワン・クパーラ」の祭りとして、確固とした民俗的記憶となって今にいたっている⁽²⁾。

(1) Вергунов А. П., Горохов В. А. Вертоград. М., 1996.

中世ロシア人の「庭」観は民俗学的資料の中に求められるだろう。理想の「王国」を歌う民衆の歌謡や言い伝えには、「緑なす草原」, 「絹のごとき草」, 「瑠璃色の花」, 「百果なす木々溢れ」といった表現が庭の枕詞のように使われていたことを民俗学者 В. Я. プロップはその著作の中で記している⁽³⁾。庭には善き獣たちが住み、そこでは「若返りの」リンゴを賞味することができ、「生命の樹」が育ち、ゼリーの岸をミルクの川が流れているのだった。

庭に対峙するのはつねに「暗き森」であった。森は深く、人間の踏破を拒み、危険で神秘に満ちていた。庭は人間にとって安全で豊かな土地でなくてはならなかった。

2. キリスト教化と修道院の庭

10世紀末、キエフ大公ウラジーミルによってビザンツ（東ローマ帝国）より正教キリスト教がとり入れられ、ロシアはキリスト教国家となっていく。信仰活動の拠点としての修道院が続々と造られてゆき、修道院での信仰生活では西ヨーロッパの修道院と同様に、ロシアでも天国の表象としての庭が営まれた。

そもそも修道院（монастырь）という言葉自体が「人里離れた場所」という意味を持つギリシヤ語から来ており、それ自体が地上の罪を逃れて高き塀で「囲われた天国」ともみなされる存在であった。実際は修道院の塀の中には教会堂、僧庵のほか、用務や生活経済上の設備建物があつたが、原則的にはあくまで修道院は、神によって清らかな自然の中に置かれた天国のモデル（地上の楽園＝エデンの園）なのであつた。

この理想化された地上の閉ざされた楽園を想起させてくれるものは中世ロシアの文献によく現われる「高貴なる樹木、草花」の類の表現であ

(2) Рыбаков В. А. Язычество Древней Руси. М., 1987.

(3) Пропп В. Я. Исторические корни волшебной сказки. Л., 1986. С. 282-290.

り⁽⁴⁾、古書の挿絵や15—16世紀のさまざまなイコン画に描かれた背景である⁽⁵⁾。

Д. С. リハチョフは修道院には三つのタイプの庭があったと言う⁽⁶⁾。実用上のもの、修道院の囲いの中にあつて楽園に擬せられたもの、修道院の塀の外にあつて聖なる林の観念と結びついていたもの、である。楽園としての内部の庭にはかならず「楽園の樹」であるリンゴがあり、香りのよい草花が小鳥を招いていた。重要な特徴として、「楽園」としての庭には柵が不可欠であることを言う。ロシア語では柵 (ограда) という言葉は、庭の別名ともいえる葡萄樹 (виноград)、菜園 (огород) という言葉のなかに見出せるとする。

しかし、ロシアでは修道院内部の楽園は西ヨーロッパの修道院の庭のような発展をたどることはなかった。14世紀中葉、セルギイ・ラドネジスキーによってトロイツェーセルギイエフ修道院が開基されてより、荒々しく厳しい荒野への隠遁、原初の無辜の自然の中での修道生活への情熱が広まった。多くの修道者が貧しい修道院を北部に求め、修道院内部の楽園は忘れ去られたのだった。

キリスト教化と共にビザンツからもたらされたものに都市の建設方法がある。Г. アルフェーロヴァは教会法の一部である『舵取りの書』が中世ロシアの都市建設法の拠りどころとなっているという⁽⁷⁾。中世ロシアの都市では建物と建物は十分な間隔を空けて建てられなくてはならなかった。

(4) Лихачев Д. С. Поэтика древнерусской литературы. 3-изд. М., 1979. Раздел «Литературный этикет».

(5) 例えば、日本で発行された『12—18世紀 聖なるロシア美術・国立歴史博物館展』カタログ (於新潟ロシア村マールイ美術館)、1993、38頁「聖ニコラスとその伝記」1595。43頁「ヴェリーキイ・ウースチュグの奇跡行者聖プロコーピイと聖ヨハネ」1679。等。

(6) Лихачев Д. С. Поэзия садов. Л., 1982. С. 48-49. 『庭園の詩学』坂内知子訳 平凡社 1987、66-67頁。

(7) Алферова Г. В. Византийский временник. 1973. Т. 35. С. 195-225.

ここで重要なことは都市をとりまく景観を遮ってはならないということである。このことは都市や修道院が自然や地形にどのような関心を持っていたかを示唆するものでもある。リハチョフは、中世ロシアでは風景に価値がおかれ、それは大寺院や修道院、都市に従属するものであったと言う。それらは周りの自然を見はるかす場所を選んで建てられたのであった。

3. 貴族屋敷（ウサージバ）の形成とモスクワ大公国

キエフ公国の時代より、諸公や大貴族はその領地に屋敷を構え、一族の私的生活の場とし、また領地経営の拠点としていたが、時代が下るに従って貴族屋敷は発展し、モスクワ大公国時代にはロシア的貴族屋敷（ウサージバ）の形成を見る。屋敷内には主館の母屋棟を中心に離れや召使たちの付属棟、厩舎、納屋、作業所、アルコール醸造所、貯蔵倉庫等々経営・家政業務上の建物がおかれ、有力貴族の屋敷内には教会も建てられた。屋敷内の土地には主館の近くに庭、菜園、果樹園がつくられ、敷地の奥には灌木や樹木が茂り、塀の向こうには領地村が続いていた。

ウサージバでは主人はゴスダーリ（君主）と呼ばれ、自分の領地内では絶対的な権力を有していた。奴隷（農奴）の生奪与権は領主の手にあり、ウサージバは小さな専制「国家（ゴスダールストヴォ）」そのものであった⁽⁸⁾。

キエフ公国時代、諸公の領土は分割相続で息子たちに分け与えられていたので、いくつもの分領公国ができた。分領国同士のせめぎあいとモンゴルの侵攻、リトアニアの攻勢の中でキエフ公国は消え、ロシアの重心はウラジーミル大公国、さらにモスクワ大公国へと移ってゆく。1380年の会

(8) モスクワのウサージバについては多数の文献資料があるが、本論では主に次の文献を参照した。

Молева Н. Усадьбы Москвы. М., 2004.

Низовский А. Усадьбы России. М., 2005.

Шокарев С. Знаменитые российские фамилии. М., 2004.

戦でモンゴル・タタール軍を打ち破るほどの力をつけたモスクワ大公国はロシア国家再編の求心力となった。モスクワを中心とする統一国家が形を明確にしてゆくにつれて、有力貴族でモスクワ公国に臣従する者が相次ぎ、モスクワ周辺には貴族のウサージバが多数形成されることとなった。モスクワ大公イワン三世（在位 1462—1505）からツァーリ（皇帝）という称号が使われ始め、イワン四世（雷帝：1533—83）は「全ロシアのツァーリ」として戴冠した。

しかし、17世紀60—70年代まではモスクワ近郊のウサージバは簡素で実用的なものでしかなかった。ツァーリの所有になるウサージバでさえ、立派な建築物も、まして美的な庭園もなく、庭は屋敷内で特に注意を向けられる存在ではなかった。ウサージバはツァーリの狩猟のための短期滞在とか、長い旅の中継用の宿舎として利用され、また、家政・経済上の用件を処理するためにおかれた屋敷であった。17世紀末のウサージバの図面からは建物や道、小川、それに林、池、果樹園や菜園が確認できる。しかし、これらの位置は自然発生的で、また実利的用途だけのためであり、漫然として、全体的な相互性を考慮して配置されたものではなかった。

4. 森のモスクワ

モスクワ近郊のウサージバで重要なのは森との関係であろう。モスクワは森の中を流れる川（モスクワ川）の段丘に、南からの外敵を防ぐべく造った要塞から放射状に発展して形成された、まるで森の中の島のような都市である。森の中には鳥獣が棲み、狩猟はロシア人の生業であり、支配階級の娯楽ともなっていた。ツァーリや大貴族たちは所領の森の中でも狩猟に最も適した区画を禁制区とし、主人とその客以外の猟を禁止して、思う存分狩猟のページェントを繰り広げて楽しむのだった。狩場のそば、または近くには必ず足場となるウサージバがあった。

現在、クレムリンから約8kmのモスクワ北東部から、面積11000ヘクタールを超える広大な森林公園「ヘラジカ島」が広がっている⁽⁹⁾。東西

22 km, 南北 10 km の区域で, そのうち 3000 ヘクタールがモスクワ市のうちにあり, ロシアで最初の国立公園となったところである. この地域はイワンⅣ世の時代よりヘラジカや熊の狩り出し, 鷹狩りの場所であった. 熊は網に追い込まれて捕獲され, 娯楽用に飼育された. ここが「ヘラジカ島」という名を得たのはアレクセイ・ミハイロヴィチ帝 (1645—1676) の時代で, 猟犬を駆り立ててヘラジカを捕獲したことによる.

ここではよく鷹狩りも催され, 南端の森は鷹匠の部落があったことから「ソコーリニキ (鷹匠たち)」と呼ばれるようになった. 現在もこの地は「ソコーリニキ文化と休息の公園」として「ヘラジカ島」に続く緑地公園地帯となっている.

この禁制区の南東端にツァーリの狩猟用の館があり, 池に野鳥を放って射止める射撃場もあった. アレクセイ帝は樹木の育苗所をつくり, そこで育てた若木を「ヘラジカ島」全体に植林した. この植林でできた松林はモスクワ近郊で最も古いものとして現在も残っており, 「アレクセーエフカ」と呼ばれている.

「ヘラジカ島」のような森林獣園内には何本もの道が一点で放射状に交差するところがある. これは東スラブの森林の民の太古からの生活の知恵で, 胡桃や蜂蜜, キノコ, ベリー類の採取, 薪取りのため, また, 野鳥を捕獲するために必要な道であった. この放射状 (星状) 径路は後世のロシアの名だたるパークに受け継がれ, 現在も多くの庭園や公園に取り入れられており, その現代性は再認識されてよいものである.

蜂蜜の採取は森林利用のしきたりを決める上で重大な要因であり, 人々は森の中で人の行動や森の管理運営の方法を厳しく定めていた. 食用の植物の採取も, 森に棲む動物や植物の季節的生態循環と緊密に関連して解禁期が定められ, 利用期間以外に入ることも横断することもできない草刈

(9) ヘラジカ島等モスクワの森林公園については次の文献を参照.

Москва. Энциклопедия. М., 1997.

Воскресенский И. Н., Куренной Г. М. Знакомьтесь-парк! М., 1986.

場や保護林などが設けられていた。これらの民衆間の禁制には民俗的な森林・樹木崇拜の要素も色濃く見られ、呪文、まじない、魔法的儀式なども行われた。

古来の民衆の森林利用地の多くは次第に諸公の領地に入り、公たちの狩猟のための森林獣園となり、森の林道は狩の便に利することになったのである。

5. 川のモスクワ

モスクワは森の中の都市であると同時に川の都市でもある。蛇行するモスクワ川の斜面を敷地としてつくられたウサージバも目立っていた。イワン雷帝の誕生を記念して建立された昇天教会がモスクワ川を望む美しい景色で有名なコロームスコエは、14世紀前半から文献に現われるモスクワ大公のウサージバであり、のちにロマノフ朝ツァーリの所有となった。大公やツァーリのウサージバであっても、17世紀60~70年代以前は華やかな館もなく、高い木の塀で外部からさえぎられた屋敷内には実用本位の建物と菜園があるだけの、閉鎖的で孤立した空間であるのが普通だったが、コロームスコエは16世紀から国家的なモニュメントがいくつも建てられた特例的な帝王のウサージバであった⁽¹⁰⁾。

コロームスコエの最盛期はアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の時代であった。ロマノフ朝二代目のツァーリであるアレクセイは、リューリク朝モスクワ大公家の断絶からロマノフ朝成立までの、約10年の動乱の時代に損なわれたコロームスコエを復興し、ポーランド軍排撃を記念して「カザンの聖母教会」を建立した。

アレクセイ帝がコロームスコエで心血を注いだのは建物の造営であっ

(10) コロームスコエに関しては次の文献を参照。

Суздалев В. Е. Очерки истории Коломенского. М., 2002.

Москва. Энциклопедия. 1997.

Вергунов А. П., Горохов В. А. 1996. С. 53-55.

た。開明的な君主であった彼はヨーロッパの技術も使って、1661年から壮大な木造宮殿を建て始め、それは次のフョードル帝（1672—82）にも引き継がれ、「270の部屋と3000の窓」⁽¹¹⁾のある木造の、西ヨーロッパ人を驚かせるような大宮殿が出来上がった。約100年後にエカテリーナ二世（1762—96）によって取り壊されるこの宮殿は、残念ながら実測の記録が残されず、数多く伝わる実証的根拠の薄い絵と同時代人の描写から、その実像を想像するのみであるが、一つの根からいくつもの個性的な建物が群生するお伽噺の宮殿のようであったと思われる。17世紀末、ロシア建築は「不自然で」、「滑稽で」、あたかもおもちゃのようなものを追求したと、ロシア中世を専門とする碩学Д.リハチョフは言う⁽¹²⁾。コロームスコエの大御殿は中世ロシアのファンタジーがモスクワ川に向かって全開した建築物であったようだ。

コロームスコエの庭にはロシア中世伝統の庭・菜園作りの伝統がうかがわれるのであるが、建築物とは比べものにならないほどの言及しか残っておらず、庭が注目を払われるべき存在とは考えられてなかったことがわかる。17世紀末のコロームスコエのある図面からは、中央部の建物群を三面から取り囲む三つの果樹園があり、モスクワ川へ向かう斜面は開けていた。それぞれの果樹園は幾何学的な区画割りがされており、リンゴ、セイヨウミザクラ、プラム、ノイバラやキイチゴ、スグリ、フサスグリの灌木が植えられていた。果樹園のほかに、建物の近くの傾斜地にはまっすぐな並木道があり、セイヨウスギ、オーク、その他の樹木が生えていて、幾本かは樹齢600年を超えて今に到っている。

庭・菜園は涼しさを作り出すために設けられており、装飾が目的のものではなく、果樹や灌木類、薬草類が植えられていた。それらは別に芸術的な意図から配置されてはいなかったが、全体としては一体感のある美しさ

(11) Дневник камер-юнкера Ф. Берхгольца, веденный им в России в царствование Петра Великого с 1721 по 1725гг. М., 1902. Ч. 2. С. 166.

(12) Лихачев Д. С. 1982. С. 113.

を作り出していたようである。むしろ、実用の果樹や野菜、野草・葉草、身の回りにある樹木、といった日常的な植物の美しさで庭が飾られていたともいえるだろう。有益さと美しさは別のものではなかったのだ。

丘の上の庭の並木道からはウサージバをとりまく景色が見渡され、散策用の場所とされていた。並木道の交差するところや目立つ場所には四阿も造られていた。最も良い眺望は昇天教会の上階東側にイワン雷帝がつくった「ツァーリの座」から得られた。ここからは蛇行するモスクワ川と河床氾濫原のパノラマが楽しめ、首都の南東部全域を見渡すことができた。また、鷹狩りを見るための絶好の場所でもあった。反対側のモスクワ川左岸からのパノラマも素晴らしいものであったにちがいない。モスクワ川は岸の形そのものがテラスをつくっているのだった。かつて、市内からこのツァーリの夏の館へは川の側から入っていたのであり、コロームスコエはしばしば外国の大使を公式に迎え入れるところでもあった。

コロームスコエにはそれまでの実利性のみでのウサージバには見られなかった娯楽性や芸術性の指向が現われてきていた。風景のとらえ方もいままでのように地平上の視点からのみではなく、高層の建物に付けられた上階の遊歩用回廊や外側につけられたテラスの高みからのものもあった。遊歩用のギャラリーは昇天教会とカザン教会に取り付けられ、宮殿と宮殿を結んで、内部の教会へと導く回廊もあった。教会建物のアーチ状の枠組みからは周囲のありさまが風景として切り取られ、鑑賞されていたことがわかる。

モスクワ川左岸段丘にあるコロームスコエは地形に恵まれて、そのものがすでに絵である。現在は歴史・建築保護自然公園となって、絶景のなかにおかれた建築物が点景となった庭園そのもののような存在となっている。17世紀、いくつものウサージバがモスクワ川の段丘や河畔につくられているが、景観美を享受しても、その地形を意図的に利用して手を加え、美的アイデアを具現しようという積極的な意識は希薄であった。

II. イズマイロヴォ：前近代最後のウサージバ

1. 大貴族ロマノフ家のウサージバ

ロシアの庭園の発達はウサージバとともにあった。17世紀半ばまでウサージバの中で営まれてきた庭が他の造営物とくらべて、目立たない、日常的なものであったことを述べてきたが、18世紀になり、急に国家が「庭園」に脚光を当てるようになるまでの間、ウサージバの庭は静かに変化していた。コロメンスコエと同じく帝室ウサージバであるイズマイロヴォをとりあげ、その発展、変遷を見てゆきたい⁽¹³⁾。

モスクワの中心、クレムリンから7～8キロメートル東にイズマイロヴォ公園という広大な緑地がある。14世紀までこのあたりは野生の蜂蜜が採取できるさらに広大な森であった。14世紀の前半、ここにモスクワ大公イワンI世（カリタ：1325—40）の従者ワシリツェフ某の所有する地があり、森の中の空地には大公の蜂蜜採取人や野獣捕獲人、野鳥猟師などが住んでいた。15世紀になって森は幾分か伐採され、その伐採地には集落ができ、耕地も現われ、モスクワ郡ワシリツェフ郷という行政区に入った。イズマイロヴォという地名は14世紀の末までさかのぼって確認できるが、最初の所有者の名（イズマイル）からきたものとみられている。

1550年、若きイワン雷帝は帝権の支柱とするべく「選抜千家」として秀抜な1070家の貴族をモスクワに移り住まわせることにした。そのなかに帝妃の弟であるニキータ・ロマノヴィチ・ザハリイン-ユーリエフも入っており、ツァーリは彼とその母に気前よく領地を下賜した。大村イズマイロヴォにソフロノヴォ、メレンキ、ブリュホヴォの三村とそのまわりの耕地、草刈地をふくむ世襲領地イズマイロヴォである。有能な政治家であるニキータ・ロマノヴィチはまた勇猛な軍人としても活躍し、全ロシア的

(13) イズマイロヴォについては主として次の資料を参照した。

Измайлово, М., Государственный исторический музей, 2000.

英雄として声望を得た人物であった。イズマイロヴォは彼の数ある領地の一つで、主人は休息のためにやって来ては、経営を監視したり、狩猟に興じたりした。

ニキータ・ロマノヴィチの死後、残された7人の息子たちは祖父の名をとってロマノフという姓を名のり始める。ロマノフ家のリューリク朝帝室との姻戚関係や民衆の人気を懸念したボリス・ゴドノフ帝（1598—1605）はニキータの息子たちに罪を着せてモスクワから遠ざけた。長男のフョードルは強制的に剃髪させられ、フィラレートという僧名で修道院に送り込まれ、他の兄弟たちは財産を取り上げられて流刑に処せられた。そこで命を失った兄弟も多かったが、ボリス帝の没後も生きのびた病弱な末弟のイワンは2年の流刑の後モスクワに帰り、その後、僭称者偽ドミトリーII世よりイズマイロヴォの世襲領地を返された。うちつづく戦乱のなかで、1609年にはイズマイロヴォは柵をめぐらされて監獄となり、300人以上のポーランド兵が捕虜として収容されたこともある。「モスクワ大破壊」のうちに主要街道の近くにあるイズマイロヴォも荒れ果て、周囲の村々には人影が消えて、耕地は雑草の生えるにまかされていった。

1613年、長兄フョードルの16歳の息子ミハイルが貴族会議で選ばれて全ロシアのツァーリ（1613—45）となり、動乱の時代は終る。イワンは皇帝側近の重臣となった。1619年にはポーランドに8年間囚われの身であったフィラレート（フョードル）がロシアに帰還し、総主教となり、皇帝の父として事実上ロシアを支配することとなる。イワンはイズマイロヴォに木造のポクロフ教会を建て、主宝座をモスクワの危機を救った聖母マリアの庇護聖衣（ポクロフ）の祭儀に捧げた。

イワンは1620年代頃までに、イズマイロヴォに大狩猟園をつくった。それは第一に若きツァーリを楽しませるためであった。キエフ公国の昔より、狩猟はビザンツ帝国よりもたらされた欠くべからざる宮中の日常行事であった。1620年にミハイル帝はスウェーデンの使節を迎えて、初めての豪華な「狩猟宴」をもよおしている。

1640年にイワンが亡くなり、イズマイロヴォは他の多くの財産と共に息子のニキータに受け継がれた。ニキータは同時代の人々からツァーリに次ぐ財産家とみなされ、ツァーリ側近にあつて力を振るつたが、また、西ヨーロッパの事情に強い関心を持ち始めた先端的なロシア人の一人であつた。邸宅にはヨーロッパ渡りの高価な食器や楽器、書物などがあり、彼はヨーロッパの服を身につけ、召使にドイツの従僕のお仕着せを着用させた。ロシア正教会総主教のニコンは彼から「罪」を除くため、その衣裳を奪つて切り刻んだという言い伝えが残っている⁽¹⁴⁾。

ニキータは、イズマイロヴォの周りを流れるヤウザ、セレブリヤンカ、ハピロフカの川を渡つてイズマイロヴォへ着くために、イギリス製の軽快なボート「聖ニコライ」を買入れた。数十年の後、麻工場の倉庫に忘れ去られていたこのボートは皇子ピョートル少年（後のピョートルⅠ世）に発見される所となり、ピョートルがボート遊びから海軍ごっこに夢中になる契機になったといわれる。このボートは後に「ロシア海軍の祖父」と呼ばれるようになり、ロシア帝国形成の一大エピソードとなった。

ニキータはロマノフ家に代々伝わる狩猟への情熱を受け継いでいたが、それを若きアレクセイ帝にも植え付けようとして、皇帝を連れて狼狩り、狐狩り、熊狩りなどに出かけた。アレクセイも狩猟を好み、若い頃の彼にとってイズマイロヴォの魅力はまずなによりもその素晴らしい狩猟地であつた。イズマイロヴォ村の南にある林の中には「狼園」（獣園）があり、ここには狼や熊、狐が飼われていた。外で自然な状態での囲い込み猟が不首尾に終わった場合、ここから動物が連れ出され、失敗に終わった狩の代償となつて、貴人たちを楽しませるのだった。

アレクセイ帝は「最穩健公」という別称を与えられている穩やかで信仰の篤い人物であつた。余談となるが、ロマノフ朝最後の皇帝であるニコラ

(14) Измайлово. М., 2000. С. 11. その他イズマイロヴォに関するものとして
Коробки М. Ю., Рысин Л. П., Авилова К. В. Измайлово. М., 1997.
Молева Н. Усадьба Москвы. М., 2004.

イⅡ世（1894—1917）は穏やかなアレクセイ帝を慕い、1903年の宮中大仮装舞踏会ではアレクセイ帝の扮装をするために、その昔アレクセイ帝がパレードに着用した衣裳を再現させた⁽¹⁵⁾。また、一人息子である皇太子をアレクセイと名づけるほどであった。

当然ながら、狩猟の持つ残酷な中世的遊戯性はしだいにアレクセイ帝のあまり好むところとはならず、帝は複雑な技術と高度な儀式性を持つ鷹狩りに傾倒していった。ツァーリの鷹狩りへの情熱は愛好者の域にとどまらず、彼は自ら詳しい鷹狩りの教本を著し、出版もしている⁽¹⁶⁾。

2. イズマイロヴォ：アレクセイ帝の実験領地

1654年、イズマイロヴォはその狩猟林とともに帝室の所有するところとなる。イズマイロヴォではアレクセイ帝の主導で、これまでロシアでは考えられなかった新機軸の領地経営が1663年から始まってゆくのである⁽¹⁷⁾。それは農業を商品経済に適う産業とすることであり、また、領地内での工業製品生産の試みであった。

アレクセイ帝は開明的な考えの持ち主でもあり、西ヨーロッパの学問・文化に大きな関心を寄せ、通商関係のあるイギリスを通じて医師、錬金術師、鉱物学者、金細工師、ガラス細工師などの技術者を雇い入れた。文化面でも、聖職者で啓蒙的古典学者のシメオン・ポーロツキーを招聘して、宮廷詩人・教師とし、正教会が排除する演劇を上演させてもいる。

アレクセイ帝のそばにあって片腕となったのが、アルタモン・セルゲエ

(15) Warnes D. Chronicle of the Russian Tsars. London. 1999. p.197. 『ロシア皇帝歴代誌』栗生沢猛夫訳、創元社、2001年、259頁。

(16) Урядник Сокольничьи пути. ГИМ（国立歴史古文書館）

(17) アレクセイ帝に関しては次の文献を参照。

Андреев И. Алексей Михайлович. М., 2003.

Федорченко В. Дом Романовых. М., 2003.

Коняев Н. Первые Романовы. М., 2002.

ヴィチ・マトヴェエフ（1625—1682）である。高貴な家柄の出身ではないが、13歳で宮中に入り、アレクセイとは幼馴染みの間柄であった。時間を惜しんで働く、「中世的でない」タイプの活動的な人物で、イズマイロヴォでの建築事業を監督し、外国人技術者を庇護し、珍しい植物をロシアの外から手に入れるため精力的に動いた。妻を亡くしたアレクセイ帝がなにげなく訪れたマトヴェエフの屋敷で、親を失って身を寄せていたナターリヤ・ナルィシキナを見初め、彼女は二番目の皇妃として迎えられる。ナターリヤ妃は1672年に強健な男児ピョートルを生み、そのことがロシアの歴史を変えることになるのである。

領地の農地や菜園、庭、畜舎からはまず宮廷に食糧が供給され、皇帝の食卓を満たさなくてはならなかったが、その残部は外で売られて、宮廷経費の一部となっていた。アレクセイ帝は宮廷経済の運営を最重要官庁である枢密官署のもとにおいた。枢密官署は皇帝の個人官房でもあり、他の官庁の監査、重大な国家的事件の調査、武器工場の統括、地下資源の探索など国家的最重要事項を司っている役所であった。ちなみにアレクセイ帝の狩猟は馬事庁、鷹狩りはこの枢密官署の管轄となっていた。アレクセイ帝はイズマイロヴォからの報告を聞き、書類に目を通し、よく余白にコメントを書き込んだ。しばしば生産現場を視察し、厩舎の起工式に出席し、管理官にさまざまな指示をあたえた。

広大な土地が整備されて耕地となった。最初の播種には総主教の穀物蔵から選りすぐった種を播いたが、次年からは自前の種で十分となり、あまった種は近習に分けられた。17世紀、三圃式農法が常識であったが、帝室の農地では五毛作が取り入れられた。ライ麦、カラス麦、春小麦、大麦、ソバ、麻、ケシなど中部ロシアでよく栽培されるものの他に、珍しいスペルト小麦、キビ、大麻なども植えられた。畑地の境に畜舎、納屋、穀物倉庫、穀物乾燥小屋などが建てられた。

多くの労働力が必要になり皇帝家のコストロマー、ヴラジーミル、アートル等の領地より千戸ほどの農家が強制的に移住させられた。イズマイロ

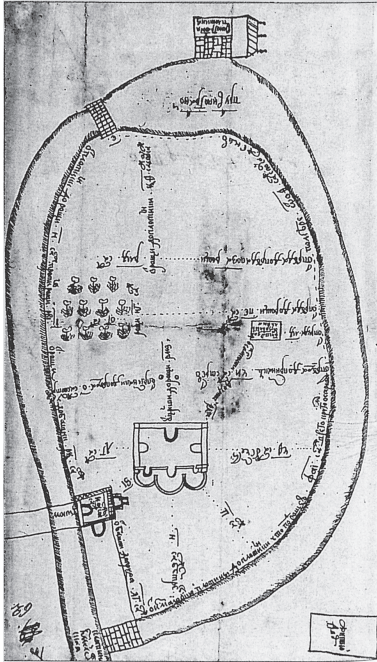


図 1

ヴォ島の北に新しい集落ができ、新イズマイロヴォ村とか新部落とか呼ばれ、五つのクーポールを持つキリスト降誕教会が建てられた。17世紀後半期の典型的なモスクワ建築であるこの石造の教会は美しい南側正面を島に向け、現存している。

1660年代中頃からイズマイロヴォではセレブリャンカ川の窪地を中心に大きく地形を変える土木事業が進んだ。1664年、南側の二つの大きな池をつないで一つの池（セレブリャンヌイ池、または、イズマイロフ池）とし、セレブリャンカ川の川底を掘って北側にブドウ池を造ることで、木造の主御殿とポクロフ教会

のあるイズマイロヴォの中心地区は島になったのである。西側、南東側には何箇所かに石の堤が築かれ、水車も造られた。この時代、セレブリャンカ川とそれに合流するいくつもの小さい川をつくる池は37もあり、水車が7つ動いていたという。（図1）

池の配置構成がこのウサージバの軸なのであった。大きい池のそばには、製麻工場、鳥舎、養蜂場、搾油工場、醸造所、麦芽工場、ビール工場、蜂蜜酒製造所が造られた。これらの工場はロシアの生産業のモデルとなるはずであった。全国からその分野の達人が探し出され、イズマイロヴォに集められた。プスコフからは麻を製品につくりあげる職人が、ベルゴロド、スモレンスク地方からは家畜や家禽の達人が呼ばれた。スモレンスクからはまた、製粉職人、大工、池掘職人、漁師、仕立て職人、靴職人、鍛冶職人、養蜂業者、猟師、皮製造職人、生皮職人、暖炉職人等々が呼び寄せら

れている。

アレクセイ帝は長年ガラス製造に興味を持ち、ヴェネツィアのガラスにあこがれていた。その夢は1668年、イズマイロヴォ島の西、石造の「ブドウ堤」のそばにガラス工場が建てられ、翌年には最初の製品を出して、現実化された。ロシアで最も早くガラス生産をになった工場のひとつとなったのだ。ここではロシア人、ウクライナ人に混じってヴェネツィアの技法を修得したドイツのガラス職人が働いていた。ガラス製造の主たる目的はツァーリの用のためであった。宮廷の食器となり、ツァーリからの下賜の品に使われ、余ったものはモスクワの商館で売られた。当代の名工たちが彫を入れ、金彩を施してさまざまな形の器を作り出したが、イズマイロヴォでつくられたガラス製品は非実用的で遊戯的な性格を特徴としていた。

このガラス工場はピョートルI世（1682—1725）の1710年に薬草園庁の所管に移され、製造も薬品用のものに限られた。これ以降もしばらく工場は存在したが、ガラス製造の中心はペテルブルグに移っていった。

3. イズマイロヴォの庭園・菜園

庭園と菜園を差配したのはアストラハンからの技術者とキエフの修道僧たちであった。彼らは篩いにかけて土と種子、灌木や苗木を持って来た。国外でも人材を探し、ロシアに招来した。1663年にはアルメニアの生糸工場主のラリオン・リゴフが、綿花の木の植え付けにはテレクの達人フォードル・アモソフが呼び寄せられた。造園や植栽、薬草栽培のためにはドイツ人、オランダ人の専門家を何人も招いている。

温室や板を被せた畝、特別な槽の中では南方種のキュウリ、メロン、スイカ、カラシ、セイヨウアカネ、キイチゴ、香辛野菜や薬草が植えられていた。イズマイロヴォの庭園にはロシアの庭園の常として、各種のリンゴ、洋ナシ、スモモが生えていた。灌木の中で大勢を占めていたのは、メギ、フサスグリ、スグリ、キイチゴであり、特にノイバラはたくさんあった。ノイバラはヨーロッパのバラの代わりをするものであり、その花と実で化

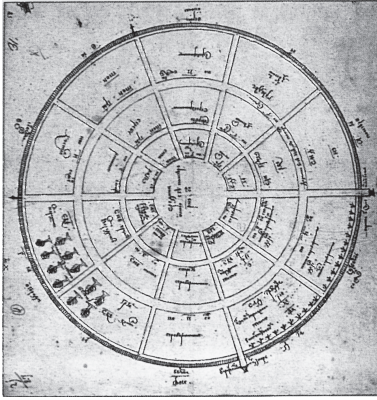


図 2

粧品や医薬品が作られた。

1660年代に描かれた図面からいくつかの庭園、菜園の様子を知ることができる。最大の庭園は「ブドウ園」で、イズマイロヴォ島の北東にあり、16ヘクタールの面積を持っていた。庭園の構成は方形の区画を隣接させたもので、四つの角を丸くしていた。庭園中心部にはブドウの苗木の温床があった。北の国ではブ

ドウの収穫はほんの数桶でしかなかったにしても、ブドウの樹はイエス・キリストと天国の庭園のシンボルであったことから大事にされたのである。

イズマイロヴォ村の南、「狼園」(獣園)の近くには直径280メートル、面積6ヘクタールの円形の薬草園(図2)がつくられていた。几帳面に同心円状に区画が割られ、きわめて実験的な性格のものであることがわかる。新しい植物の栽培や南方種の植物を寒冷地に順化させる試みがおこなわれていた。

4. ウサージバ：イズマイロヴォ島

多数の生産施設とならんで、領地の中心であるイズマイロヴォ島内の華麗な建築事業が進んでいった。当時橋は木造ばかりだったが、ロシアの先端をゆくような石造の橋が1670年代初めに完成した。長さ106メートル、幅10、65メートルの色タイルの欄干で飾られた堂々としたもので、島の側、セレブリャヌィ池の辺の橋詰には三層の塔が付けられた。一層、二層は衛兵がいて見張りをする場所であるが、八面体で上に角錐状の屋根を抱く三層目の内部には鐘が吊るされ、ポクロフ寺院の鐘楼も兼ねていた。要塞の用途も果たす厳つかがしりした構造の橋塔は、また、晴れやかに飾り立てられてもいる建造物であり、モスクワのクレムリンのいくつかの塔

に類似するものである。石橋は1767年、エカテリーナⅡ世の時代に取り壊されたが、橋塔の方は当時の姿のまま現存する。

橋塔と同時に木造のポクロフ教会の跡に五つのクーポルを戴く石造の教会が建てられた。教会の規模はクーポルだけで18メートル、全長は57メートルもあり、モスクワ、クレムリンのウスペンスキー寺院を思い起こさせるものである。教会の聖別式は1679年、アレクセイ帝の息子のフョードル帝（1676—82）の代になって行われた。

アレクセイ帝の在世中はイズマイロヴォ島にまだ古い木造の主御殿しかなかった。新しい宮殿が建てられ始めるのは、息子のフョードルが帝位に就く1676年になってからであるが、イズマイロヴォの新しいウサージバはアレクセイ帝の構想によるものであった。息子のフョードルは14歳で即位し、病弱で6年しか在位しなかったが、当時としては十分な教養をつんだ人物で、芸術、建築に強い興味を持っていた。フョードル帝の短い治世の間にモスクワ・クレムリンの多くの建物が改築、増築され、離宮や諸官庁の建物も建てられている。

新しく建てられたイズマイロヴォの主人たちの宮殿はポクロフ寺院西の、島の中央部のほとんどを占める四角い領域にあった。屋敷は東西290メートル、南北222メートルの長方形の土地をぐるりと囲む石造一階建ての棟が基本となっていた。暖かい南東辺の一部に木造二階建ての宮殿が建てられ、四辺をなす棟は執務・業務用につくられた。1687年にこの宮殿にはイワンⅤ世（1682—1696）、ピョートルⅠ世の両帝、摂政皇女ソフィヤ、皇太后ナターリヤ、それに他の皇女たちの部屋があった。二階が最良の階で、応接室、祈禱室、居室が置かれていた。北側の棟には宮内庁や食糧関係の役所、倉庫、厨房などが入っていた。1700年2月、イズマイロヴォの宮殿は火事にあい、1702年にほぼ新たに立て直された。

この屋敷はポクロフ寺院の西入口に向って正門があり、正反対の側にも同じ形の裏門がつくられた。両門に接して延びる左右の棟は銃兵隊将校、兵士の兵舎であった。この屋敷領域の軸をつくる両門は1840年代に建築

家 K. トン⁽¹⁸⁾によって手を加えられたが、二つとも現存している。正門は下層部分に均整の取れた三つの大きなアーチを持ち、ヨーロッパ・バロック建築の特徴を見せているが、その上層部となる八角体と八角錐の塔はいかにも古風な、中世モスクワの伝統的様式であり、この様式の混在は17世紀後半のロシアの文化状況を語るものでもある。

ほかに通用口が北のブドウ池側に二ヶ所、南の宮殿側に小さい門が三つあった。南の門からは皇帝家家庭教会である「インド王子イオアサフ⁽¹⁹⁾教会」や「島の庭園」、「白樺林」へと通じていた。屋敷の南東辺にそってある「白樺林」の向こうにはセレブリャンヌイ池の水面が見えた。屋敷内の中庭は中央部がこんもりと盛りあがって小さい林になっていたが、辺りには半地下貯蔵庫や倉庫などがあるばかりで、美的な工夫をしたという痕跡は見られない。

5. イズマイロヴォの運命

イズマイロヴォが最も輝いていたのはアレクセイ帝の時代であった。短い治世のフョードル帝の後、1682年病弱な兄イワンと共に即位した少年帝のピョートルは異母姉で摂政のソフィアの手の内にあるイズマイロヴォを避けて、母、妹とプレオブラジェンスコエ村に住んでいた。ピョートル I 世は狩を好まず、彼とイズマイロヴォをポジティブに結びつけるのは、上述したごとく、1688年に彼が麻工場の倉庫の中でイギリス製のボート（小型帆船）を見つけた事実だけでしかない。ピョートル I 世の単独統治となってからは、それまでとは時代を画する改革が断行されてゆくが、イズマイロヴォはその波に乗ることはなかった。政治的重心は新都サンクト・ペテルブルグに移り、モスクワは置き去りにされ、その後、イズマイ

(18) Константин Андреевич Тон (1799-1881) ロシア・ビザンツ様式の建築家。モスクワにキリスト救世主教会、クレムリン大宮殿、現レニングラード駅等、多数の建物をつくる。

(19) ロシア正教の宗教説話上の人物。

ロヴォの主人となったのはほとんど女性ばかりであった。

イズマイロヴォは主にピョートル I 世の異母兄イワン V 世の遺族が住む離宮になってゆき、寡婦となったプラスコヴィヤ皇后と三人の皇女の住居となった⁽²⁰⁾。彼女たちの生活はピョートル I 世の意のままであり、1708 年にはペテルブルグへ移住を余儀なくされている。しかし、許しが得られるやすぐさま彼女たちはモスクワへ帰り、昔のモスクワそのままのイズマイロヴォに住むのだった。兄嫁の恭順さにピョートルは敬意を表し、彼女にだけは昔風のロシアの着衣を許していた。古い貴族の家に育ったプラスコヴィヤは信心深く、迷信家であり、イズマイロヴォは片輪、宗教愚者、ペテン師、偽善家、盗人たちの巣窟となっていった。

イワン V 世の皇女たちはピョートル I 世にとっては貴重な外交カードであった。二番目のアンナは 1710 年にクールラント公に嫁がされ、結婚式 2 ヶ月後に夫が亡くなったのち一時イズマイロヴォに帰ったが、ピョートルにクールラント公国に定住するよう命じられる。年長のエカテリーナは 1716 年メクレンブルグ-シュベリン公と結婚させられたが、1722 年には娘のアンナを連れてモスクワに戻ってきた。娘たちの結婚がうまくいかず、ピョートルの不興を買ったイワン V 世の一族の住むイズマイロヴォは貧しく、修道院のようであったという。

ピョートル I 世の孫である少年帝ピョートル II 世 (1727—1730) の登場はイズマイロヴォに一瞬の光輝をもたらした。ピョートル II 世は一年のうち 8 ヶ月を狩りに出て過ごしたほどの狩猟好きで、好んで滞在したイズマイロヴォは画家イワン・ズーボフの描くところとなった。その絵は 1702 年に建て直された宮殿を背景として、ピョートル II 世が寵臣のアレクセイ・ドルゴルーコフ公爵と楽しげに一緒に馬車に乗り、狩りに出かける場面を描くもので、イズマイロヴォ島の晴れがましい様子を今に伝えるもので

(20) この時期のイズマイロヴォについては次の文献を参照。

Анисимов Е. В. Анна Ивановна. М., 2002.



図 3

ある。(図 3)

ピョートルⅡ世が早々と没した後、クールラントでの不遇な生活を強いられていたアンナが帝位(1730—1740)に登ることとなった。即位式の後、1730年の夏を彼女は子供時代を送った懐かしいイズマイロヴォで過ごす。女帝の命令で三番目の近衛軍、イズマイロフスキー連隊が創設された。また、島の南に大規模な獣園がつくられ、1826年まで存続し、その遺構は現在も見られる。

エリザヴェータ帝(1741—1761)も狩猟好きで、彼女の治世下でイズマイロヴォは皇帝の狩猟地として活気を帯びたところであった。彼女は寵臣のアレクセイ・ラズウモフスキーにイズマイロヴォに隣接するペローヴォ村を贈与した。イズマイロヴォの森にフランチェスコ・ラストレッリ⁽²¹⁾が狩用の館を建て、ここから女帝がペローヴォ村に通うために広い直線の道が拓り開かれた。この道は現在イズマイロフスキー公園のメイン・ロードとなっている。

皇帝が来るたびにイズマイロヴォには陽が射し、建物は修復されたが、徐々にそれも間遠になり、エカテリーナ二世の君臨する1770年代には石橋と宮殿が取り壊され、誰からも忘れられた存在になっていった。

6. 再生イズマイロヴォとその後

再びイズマイロヴォが姿を整えて現われるのはニコライI世（1825—1855）の治世下、1838年である。ナポレオン軍撃破の25周年にあたり、イズマイロヴォはナポレオン戦争の戦傷軍人の養老院となることが決まる。戦争勝利の高揚感にロシアに愛国的気分を呼び起こし、古きロシア、古都モスクワへの懐古的愛着、礼賛の波が起こり、その世相を背景に、モスクワの歴史的建造物を利用して造る運びとなったのである。K. トンの設計でポクロフ寺院の南北東の三面に三階建ての長い棟が増築され、寺院は養老院内教会となった。四辺に棟をめぐらせた主屋敷も建て直さず、利用されることになり、1839年から10年間修築工事が行われた。北側の兵士棟は病棟となり、2階、3階は傷病兵の居室となった。南側の士官棟の1階には食堂がおかれた。他の古い建築物にも修復の手が入り、イズマイロヴォ島はかなりの部分往事の姿を取り戻した。1849年末、ニコライI世臨御のもとでポクロフ寺院の聖別式が行われ、翌年3月、ニコライ戦傷軍人養老院として正式に開設された。

イズマイロヴォ養老院は1917年、ロシア革命が起こるまで存続した。レーニンの名称を冠する試みもむなしく、戦傷者への手当てを給付するアレクサンドル委員会が廃止されることで閉鎖されることとなる。

19世紀半ばからイズマイロヴォの周辺地域は紡績、染色工業の工場地帯となり、北側には労働者の住宅が広がっていた。1924年から労働者の住宅ゾーンは旧ウサージバの領域にも入り込んで、1960年代まで拡張し

(21) Франческо Растрелли (1700-1771) イタリア人建築家。1716年よりロシアで仕事をする。冬宮（現エルミタージュ）、スモリヌイ寺院、ストロガノフ邸などペテルブルグを代表する建物をつくる。

ていった。1930年にイズマイロヴォの森林地区の一部、かつての「獣園」を含む狩猟地が文化と休息の公園としてのイズマイロフスキー・パークとなり、第二次世界大戦をはさんで公園としての整備が施された。今ではモスクワ有数の大公園となって、市民の憩いの場所となっている。

イズマイロヴォ島内も1974年—85年に修復工事が行われ、屋敷の諸棟が元の姿を取りもどした。現在、イズマイロヴォ島には橋塔の先の石橋とインド王子イオアサフ教会（1936—37年に取り壊される）は見られないが、19世紀半ばの様子を目にすることができる。

結び

ロシア語の「庭」「庭園」садという言葉は、「植えつける」садитьという動詞の語幹である。現在、садはわたしたちの思い描く近代的庭園をも意味するが、1700年以前のロシアにはそういった庭園はなかった。本論ではロシアの庭が育ってきた貴族屋敷の成り立ちから始めて、中世ロシアの庭の独自性と発展を追ってみた。17世紀後半の帝室領イズマイロヴォをとりあげ、庭の近世直前までのありようを見たが、садとは「薬草園」、「ブドウ園」、「鳥園」等、実用的な目的の土地区画であり、それらがすでに美的な構成要素を持っているにしろ、全体的な庭園構想の中でつくられているわけではなかった。庭と呼ばれる部分は敷地内の建造物とは比較にならない、地味で日常的な存在でしかなかった。つまり、実用性に勝る美的な自己主張をするものではなかったのである。換言するならば、近代以前のロシアには「実用庭」はあっても、「庭園」はなかったとも言えるだろう。イズマイロヴォの庭園を考えると、「庭」部分のみを見ることは意味がなく、狩猟パークも含めたウサージバの全体から庭を捉えなくてはならない。

イズマイロヴォは17世紀後半、前近代最後の段階のロシアにあって西ヨーロッパの技術を先取りし、時代の先端を切るものであったが、ロシアが政治的に大転換した18世紀より時代に置き去りにされるさだめにあっ

た。その地に縁を結んだ人々の政治的運命がイズマイロヴォを旧時代の遺物としてしまったのである。

18世紀以降、ロシアでは国家や大貴族が続々と大規模な庭園を造ってゆく。庭園がヨーロッパの大国の調度として必要なものであったからだ。

しかし、ヨーロッパ流の発展の流れにあっても、ロシア庭園の独自性はまったく失われるということはなく、ひっそりと息づいてきたはずである。広大な森に住むロシアの人々は自分たちの生活が必要としている物の美しさを楽しむことにたくみであった。同時に、非日常の世界へも強い憧れを持ってきた人々の自然観、土地感覚は現代ロシアの庭園にあっても必ずや脈打っているだろう。